

新渡戸稲造と日本の外国語教育

香山 美紀

I はじめに

中学校3年間、高等学校3年間、大学4年間、合計10年間の英語教育を終えても、日本人は何故英語で自由にコミュニケーションすることができないのだろうか。どうして日本人は英語を聞き取り、理解することが苦手なのだろうか。英語の教師として私はこうした疑問を常に抱きつづけてきた。国際社会において日本だけが外国語教育に遅れをとっているように思われる。21世紀に向けて新たな教育改革が、一層求められている。一体日本の将来の外国語教育像はどうあるべきなのだろうか。

この論文では国際人として、教育者として、思想家として、数々の著作を残した新渡戸稲造の外国語教育に対する考え方に焦点を当てて、考察を試みる。「日本における外国語の効用とその研究」は、当時国際連盟事務局事務次長であった新渡戸が英語で執筆したものである。文化交流促進のため国際連盟の知的協力委員会に提出するのが目的であった。この新渡戸による研究論文は70年前に書かれたが、現代の日本の外国語教育にも通じる秀作であると思われる。

II 新渡戸稲造

新渡戸稲造は多方面に渡って活躍した。佐藤全弘は、新渡戸の業績について7つの分野を列挙している。(1)教育者、(2)農学者、(3)日本学者、(4)国際人、(5)言論人、(6)著述家、(7)思想家である。⁽¹⁾ 現在広い視野と様々な分野に渡る豊かな知識と、教養を備えた人材が不足していると言われる。新渡戸稲造は語学に堪能で、日本のことを海外に紹介することのできる能力を持った国際人であった。この研究では、特に第一番目の教育者、第四番目の国際人と第七番目の思想家としての業績に注目したい。

ジョージ・オーシロは新渡戸稲造について以下のように述べている。

新渡戸稲造は戦前の日本のエリートの中でも傑出した存在であった。二十世紀初頭の約三十年間に、台湾総督府の高官、†第一高等学校長、東京帝国大学教授（植民政策）、東京女子大学初代学長、国際連盟事務局事務次長、勅選貴族院議員、太平洋問題調査会（IPR）理事長などを歴任した。彼はとりわけ国際文化交流の分野で

の活躍をつうじて、国の内外に名を知られていた。死後、彼の国家への功勞に対して勲一等瑞宝章が贈られている。

新渡戸は自由主義者として、また西洋びいきの思想をもつクリスチャンとして知られていた。外国生活が長く、当時の日本人としては珍しく英語に堪能であった。講演者としても人気があり、彼の演説や講演は聞き手に非常な感銘を与えた。容姿が整い、服の着こなしも完璧で、アメリカ人の妻とともに西洋風のライフスタイルを送る彼は、日本人離れした都会的な紳士であり、立派な国際人であると考えられていた。

明治時代後半と大正時代に新渡戸の著作が大いに読まれ、彼の唱道した道德心の高揚と人格向上の思想は当時のすべての階層の青年を感化した。⁽²⁾

このような輝かしい業績に加えて、彼の英語での著作「武士道」は日本の武士道と西洋の騎士道を比較研究し、日本の精神文化を海外に紹介し、多くの知識人によって評価された。

新渡戸稲造は1862年9月1日、盛岡の南部藩に武士の子として生まれた。幼少時から稲造は盛岡で英語教育を受けた。彼の母親には伝統的な中国古典の教育だけでなく、英語教育の重要性を認識する先見の明があった。新渡戸は1871年に上京し、73年に東京外国語学校に入学する。そこでアメリカ人、イギリス人の教師からレベルの高い授業を受けた。これが後に国際人として活躍するための英語力の基礎となった。

1884年新渡戸はアメリカのジョンズ・ホプキンス大学に編入した。

稲造が入学した頃のジョンズ・ホプキンス大学は、アメリカ初の大学院を設立してわずか八年しかたっておらず、まだ大学院は形成期にあった。稲造が一年生のとき在籍していた学生数は、大学院生と研究生が百七十四名、大学生が六十九名、特待生が四十七名で、総勢二百九十名であり、教員数は五十二名であった。開校後短期間にアメリカで最も多くの博士を生み出し、その数は五十四名にのぼった。⁽³⁾

彼は大学院に3年間在籍し、ウッドロー・ウィルソンと共に勉強し、1890年に名誉文学士号を授与された。

ボルチモアで稲造はクエーカー教徒として洗礼を受けた。妻となるメアリー・エルキントンとの出会いは、クエーカーの集会における出来事であった。メアリーはフィラデルフィアの名家の娘であり、日本に深い関心を抱き、新渡戸の仕事に対して理解を示した。アメリカから船で太平洋を渡り、家族や友人から遠く離れた日本で、新しい生活を

始めることには大変な勇気がいる。当時はまだ日本における国際結婚は非常に少なかった。献身的なメアリーが生涯を通じて新渡戸を支え、助けたのはいうまでもない。

この後新渡戸稲造は、アメリカとドイツにおける6年4ヶ月の留学期間を終え、日本に帰国する。札幌農学校教授、京都帝国大学教授、第一高等学校長、東京帝国大学教授、東京女子大学初代学長を歴任する。

新渡戸が国際連盟事務局事務次長となったのは、1920年、58歳のときである。ジュネーブに移り、学者として文化的、思想的な側面から連盟を支持した。その豊かな教養と知識に人々は尊敬の念を覚えた。

…稲造の功績の中でもっとも有名で、彼自身も七年にわたる連盟での仕事の中で最も誇りに思っていたものは、知的協力委員会の仕事であった。このプロジェクトは、国際連盟委員会のベルギー代表が、「国際学芸関係」を連盟規約に含めるべきであると提案したことに起因する。当初は取り上げられなかったが、連盟の第一回総会でこの提案について討議された。後、協議会で、フランス代表のル・ブルジョワが「知的協力及び教育の問題」を取り扱う委員会の設置を提議した。実務は事務局がすることになり、ドラモンドは稲造にこのプロジェクトを任せた。⁽⁴⁾

この委員会で稲造は教育関係の研究に積極的に取り組み、世界的な学術交流を促した。知的協力委員会には著名な学者が任命され、多様な分野における多国間の知的協力を目標として活動した。委員の中にはパリ大学物理学のキュリー夫人、ベルリン大学の物理学のアインシュタイン教授などの名前がある。⁽⁵⁾

知的教育委員会の仕事が生み出したのが「日本における外国語の効用とその研究」(“The Use and Study of Foreign Languages in Japan”)である。この研究論文は国際連盟に提出された後、1929年に出版された。日本語の成立を文化的・社会学的に分析し、日本における外国語教育を、国際文化交流という広い視野から考察している。言語は文化の基礎にあり、文化を理解しなければ言語を理解することはできない。“It’s not words that make sense; it’s people.”(言葉ではなく人が意味をなすのだ。)という言葉には、文化的・国際的な相互理解が集約されていると思う。言葉が主人公ではなく、人間主導の文化交流を構築していかなければ、異文化間のコミュニケーションは成立しないということである。

III 日本語と外国語

日本語の歴史的成立について、中国の影響を抜きにして語ることはできない。「日本

における外国語の効用とその研究」の第1章で、新渡戸は中国と朝鮮と日本の三国関係を、西洋におけるエジプト、クレタ、ギリシャの関係になぞらえて説明している。

Very early in their history and, indeed, before history came to be recorded, the intercourse between China, Korea and Japan had begun, the triangular relations reminding us of those of Egypt, Crete and Greece. China had the oldest and the most advanced civilisation, and Korea thrived under her intellectual and political guidance. Later, Korea passed on its imported arts and sciences to Japan, when she was just emerging from the bronze age.⁽⁶⁾

つまり日本文化の起源は中国にあり、文化の伝達過程において朝鮮が、仲介者としての大きな役割を果たした。日本語は中国語の表意文字である漢字を借用して、表記されるようになった。しかし話し言葉としての大和言葉は書き言葉としての中国語と共存することになり、日本語の文法的構造は中国語の影響で変化することはなかった。

第一に平仮名と片仮名が、漢字を簡略化した日本独自の表音文字として成立した。新渡戸は48文字から成る、いろは歌を以下のように翻訳している。

Colours, gleam as they may,
How they blow away!
Who in this world of ours
Lasts for aye?
The deep mountains of phenomenal being
We've crossed this day.
No more shallow dreams we see
Nor shall we inebriate be.⁽⁷⁾

いろは歌は仮名を覚える詩の形態をとりながら、仏教の教えを説いている。その美しい言葉を、英語の韻律に置き換えて翻訳するのは、日本語と英語両方の高度な教養が必要とされる。日本的なものを英語で外国人に理解できるように説明する能力が、将来ますます求められるだろう。

第二に漢字は日本語の音と訓を付けられることになった。表意文字として日本語の訓読みをあてるだけでなく、中国語の発音を保存して音読みとしたのである。

中国から漢字を借用したことによって、日本語には新たな長所と短所が生まれた。長所は語彙が増加したこと、表記文字が成立したこと、また文化的には中国の古典研究が盛んになったこと、中国を通して仏教が伝来したこと、などである。短所は筆記が複雑で、日本語の書き言葉の習得が困難になったことが挙げられる。ここで新渡戸は日本の子供たちと西洋の子供たちを比較し、母国語の習得に学校でどれだけの授業時間があてられているのか分析している。古い資料ではあるが、非常に興味深い国際比較である。

During the six years of the primary school course, eleven and one-third hours weekly are devoted to the study of Japanese, whereas in Europe and America only about eight hours are devoted to the native language. Japanese children spend 44% of their school days in learning their mother tongue as against 31% by Europeans. During their school years Japanese children learn 9,900 words, while German children master 48,000. That is to say, it takes Japanese children 4 hours 20 minutes to learn one hundred words, while German children require only 38 minutes. The result of investigation seems to show that the vocabulary and the reading capacity of an ordinary Japanese youth at the age of fifteen is about on a level with the average German child of eight. ⁽⁸⁾

小学校六年間で母国語の授業は、日本では毎週11時間21分行われていたが、ヨーロッパ、アメリカでは毎週平均8時間である。それだけの時間をかけても、日本人の15歳の平均的な少年の語彙と読書能力は、平均的ドイツ人の8歳と同じレベルであるという驚くべき調査が示されている。漢字は日本語の表現の豊かさ、文化的教養を受けると同時に、子供たちの学習の負担となっている。

この問題の解決のために、新渡戸は常用漢字の制限を提案している。漢字の保存を求めながら、児童・生徒の負担を軽減する方策として、この政策は有効であると思う。日本文化の存続と継承を願う学識のある人々は、漢字の廃止ではなく、効率の良い用法を考えるべきである。

日本語には多くの外来語が取り入れられ、使用されている。新渡戸はこの現象について以下のように記している。

A Dictionary of Foreign Words in Common Use, a book recently published, contains about 5,000 European words which are in common use

without translation. Many of these might easily be translated, but they circulate in their original form. Why?

There may be various reasons, such as (1) brevity and hence convenience; (2) euphony and hence the pleasure of harmonious sounds; (3) expressiveness or force; (4) vanity or the desire to show off one's acquisition of an alien tongue; (5) love of variety in order to break the monotony of the language.⁽⁹⁾

現在も外来語が好んで使われる機会があり、その理由も上記の五つの分類に当てはまると考えられる。(1)簡潔さ、(2)言葉の美しさ、(3)豊かな表現力、(4)外国語能力を見せびらかしたい気持ち、(5)言葉に変化を求めることである。特に今日では(4)の外国語能力を見せびらかしたいという願望が幅を利かせ、美しい日本語を乱す要因になっていることが危惧されている。

日本は、歴史的観点からどのような外国語の影響を受けてきたのだろうか。18世紀にオランダ語の流入と蘭学の発達が起こった。当初オランダ語の知識は貿易、医学の分野に限られ、日本の医学の発展に貢献した。しかし鎖国政策をとっていた当時の日本では、一般市民にはどの西洋語の研究も厳しく禁じられていた。

1854年に開国した日本政府は、外国語教育の重要性と必要性に直面する。当時学習された言語は以下の通りである。

The Government was forcibly convinced of the necessity of providing itself with a duly trained interpretation service. The new order consequent upon the opening of the country to foreign trade created a sudden demand for the knowledge of Western languages -- particularly of English, as the lingua franca of commerce in the East, and then of Russian, because of Russia's ominous approach, of French, because of the great military strength of France (remember it was in the days of Louis Napoléon) as well as of her famous Code Napoléon, and, to a lesser degree, of German, as being nearest to Dutch and therefore most convenient for medical students.⁽¹⁰⁾

今日では、高等教育機関において英語、フランス語、ドイツ語のみが重要視され、他の言語の存在感が薄いのは残念なことである。国際化を促進するためには、外国人が全て英語を話すという先入観を捨て、アジアの言葉や東欧、アフリカの言葉などを積極的

に勉強すべきであると思う。

日本における外国語研究の影響については、新渡戸の北米での講演の原稿集である「日本文化の講義」の中に簡潔にまとめられている。

1. The most evident effect of the study of foreign languages is the enlargement of the national vocabulary. Hundreds of English words have been incorporated into Japanese. Some of these words can be easily translated, but they are nevertheless used in the original, except in strictly Japanese composition.
2. A highly interesting and useful result of the study of foreign languages is the fact that it has led to intelligent research of our native tongue.
3. As the knowledge of a foreign tongue spreads, the advantages of an alphabetic over a syllabic system of writing suggests itself. Transliteration, or Romanization, by which is meant writing Japanese words in Latin letters of the alphabet, has been a question seriously discussed.
4. The study of its tongues has brought the West nearer in every way. It has exerted a potent influence in cultivating the international mind, by which I mean that attitude of mind which enables one to see things from a world point of view.
5. It does not take a genius to know that “words are things, and a small drop of ink, falling like dew, upon a thought, produces that which makes thousands, perhaps millions, think.”⁽¹⁾

第一に語彙の増加は重要な側面である。特に専門分野において外来語をそのまま用いる傾向が顕著である。先端医学においては外来語がそのまま片仮名書きで使われ、日本語の語彙として導入される。現在では商品名、会社名も片仮名書きの外来語風のものが好まれている。

第二に日本語に対する知的興味が、外国人の間にゆっくりと広まりつつある。以前アメリカでは中国語を学習する人の方が圧倒的に多かったが、日本の経済力に着目しビジネスの面から日本語を習得しようとする人も年々増加している。しかし日本語の出来る外国人通訳はいまだに不足しており、日本人通訳が英語から日本語、日本語から英語の

両方を通訳しているのが現状である。将来的には日本語から英語の翻訳にはネイティブの通訳が活躍してほしいと思う。日本語の国際化を求めて、もっと日本語学習者の増加に期待したいものである。

第三に日本語に比べてアルファベット表記の方が有用であることが述べられている。日本語から漢字を排除すれば、日本の文化が損なわれるのではないだろうか。しかし、漢字学習が日本での教育が記憶偏重であることの一因となっていることも確かだと思う。また学習者の大きな負担となっていることも前に述べた通りである。

第四に、今日の日本には多くの外国人が住んでいる。様々な言葉が話され、多種多様のレストランがエスニック料理を供している。学校での授業だけではなく、このような日常的な一人一人の文化交流が、国際心—— international mind の育成に役立つと思う。

最後に、言葉は生き物であり、世界中多くの人々を動かすことができる。まさに“Pen is mightier than the sword.”（ペンは剣よりも強し）である。

IV 将来の外国語教育

日本人には語学の素質がないのか。この章では日本の外国語教育の問題点と国際理解に向けた将来への展望について、そして1920年代の日本における教育思想について考察したいと思う。五千円札に印刷された新渡戸の肖像は、何を語ろうとしているのだろうか。新渡戸の深い教育理念を探り、彼の人生哲学について思索したい。

実際、日本人が英語を学ぶ大変さは、アメリカ人が日本語を学ぶ困難に匹敵する。文法的構造がまるで異なる二つの言語、日本語と英語は、世界の言語をその類似性の遠近によって直線上に位置づけるとすれば、直線の遠い両端に位置することであろう。言語学的差異によって生じた学習上の困難は、学習者の能力とは無関係であると思う。

アメリカ外国語センター副所長であり、言語学者であるリチャード・ブレヒトによると、英語を母国語とする人々にとって世界で一番難解な言語は日本語だという。彼は次のように記している。

As Brecht explains it, the challenge with Japanese is threefold. First, there's the fact that the Japanese written code is different from the spoken code. "Therefore, you can't learn to speak the language by learning to read it," and vice versa. What's more, there are three different writing systems to master. The *kanji* system uses characters borrowed from Chinese. Users need to learn 10,000 to 15,000 of these characters through rote memorization;

there are no mnemonic devices to help. Written Japanese also makes use of two syllabary systems: *kata-kana* for loan words and emphasis, and *hiragana* for spelling suffixes and grammatical particles.

Get beyond that and you're faced with a culture that, says Brecht, is "truly foreign for most Americans". With many languages, students start by leaning introductions (*Comment allez-vous? Très bien, merci, et vous?*) "But with Japanese, you can't even begin to do that with lesson one because of the social distinctions involved in making introductions," says Brecht. Age, social status, gender ——— "all these sociological factors make it so complicated that introductions can't be the first lesson," he notes.

Finally, there's the issue of grammar. In English syntax, grammar is right branching. We set a topic and then comment upon it: "I saw the man who was sitting on the red chair, which was sitting beside the door." Japanese syntax is left branching ——— "totally contrary to our approach," says Brecht. Thus, the sentence above becomes something along the lines of: "I saw the red, which was the chair, which was..." You get the idea. ⁽¹²⁾

日本語が難しいのは、第一に書き言葉と話し言葉の相違である。日本では漢字を中国から導入し、10,000から15,000の漢字が使われている。それだけでなく、日本独自の平仮名、片仮名も併用されている。アメリカ人にとって、これらの文字を覚えるのが困難である。

そして文化や習慣の違いから、場面ごとに使う表現や言い回しが英語にはないものが多い。英語に訳せない表現として、「いただきます」、「ごちそうさま」、「よろしく願います」、「お疲れ様でした」などがある。日本の習慣や、行儀作法、マナーが理解できなければ、コミュニケーションは成立しない。

そして文法的構造が英語と日本語はまるで異なっている。したがって、英語で内容を考えながら、日本語に訳して話すということはほとんど不可能である。

「日本における外国語の効用とその研究」十五章で、新渡戸は「民族の言語的不適応性」について述べている。ここでは日本人の言語的能力の欠如、もしくは不足が指摘されている。その理由については以下のようなものである。

Is it due to the stoical training of which silence is one of the principal injunctions? Is it due to the tradition, engendered by long isolation from the

rest of the world, which regarded all alien tongues as barbarous? Is it due to the mental insularity induced by geographical position? Is it due to the general social aloofness inherited from feudal times? Any or all of these reasons may explain the aversion of the Japanese to a foreign speech. ⁽¹³⁾

“Speech is silver, silence is golden”（雄弁は銀、沈黙は金）と言われるように、沈黙を美德とするのは日本だけではない。しかし日本の学校教育では特に沈黙に加えて服従が求められているように思われる。300年間に渡る鎖国は日本の精神的島国根性を助長した。地理的にも海に囲まれた島国からなる日本は、外国語の必要性に迫られることが比較的少なかった。外国のことは知らなくてもいい、外国に旅行するつもりはない、英語は勉強したくないといった学生がいて、驚いたことがある。そのような若者は今日ではごく少数であることを願いたい。

新渡戸によると日本人は語学力がないという。

Signs of their linguistic weakness show themselves in the mental tests of Japanese children. According to Professor Darsie's report on the mental test of Japanese children in California, they are noticeably less apt in this respect than American children. He says that in other tests, the Japanese children are equal to and even superior to the American children. Among the test which require no language are those which measure the reasoning and the memorising power; he found that Japanese children are superior to American in the latter and equal to them in the former. ⁽¹⁴⁾

このダーズィ教授によって行われたテストの結果によると、日本の子供たちはアメリカの子供たちより語学力が劣っているという。記憶力は日本の子供たちの方が勝り、推理力はアメリカの子供たちと同程度である。戦前の日本はまだ国際舞台で活躍する機会が少なかった。アジアの小国であり、現在誇るような経済力をまだ持ち合わせていなかった。新渡戸の日本人が西洋人に言語学的に劣るとする考え方は、当時の時代背景を反映しているものであると考えられる。

新渡戸が論文の中で述べているように、日本語は音素の数が他国語に比較して非常に少ない。日本語における音は50余りのみである。例えば中国語には533、広東語には707の音が見られるという。したがって日本人にとって外国語の音を聞き取ったり、発音したりするのは困難である。

戦前の日本での語学教育は主に知的探求、学問的研究の手段として用いられてきた。外国生活や海外体験のない外国語教員も多かった。会話は出来なくても、文学や歴史、語彙力などが要求された。このような価値観が日本人の語学力の発達を妨げる結果となったのである。

いまだに日本の外国語学習者は話をすることを恐れている人が多い。外国人に英語で道を聞かれて、“I don't speak English.”と英語で答えたりする。最悪の場合は何も言わずただ逃げる日本人もいるという。一体日本における英語教育は何をしてきたのだろうか。

V おわりに

21世紀を迎えるにあたって、日本は日々国際化を迫られている。英語だけでなく、様々な言語を話す人々が日本の各地に流入している。新渡戸の時代と異なり、海外留学はエリートだけの特権ではなくなった。毎年多くの学生がホームステイ、留学にと日本を旅立っていく。映画や音楽も海外のものが続々と輸入されている。通信網、交通網の発達で、外国と日本の距離は大幅に短縮された。

情報の氾濫は、かえって誤解や文化摩擦を引き起こしている場合もある。

日本の外国語教育は単語力や文法的知識のみに偏ることなく、各国の文化的背景や歴史、政治、経済、常識、習慣、マナーなどの教育に努め、国際的な相互理解に貢献すべきであると思う。

異文化間の相互理解には相手への思いやり、尊敬の念が不可欠である。語学の知識だけでは心の国際人になることはできない。コミュニケーションは言葉でなく、心でするものではないだろうか。

-
- (1) 佐藤全弘「新渡戸稲造の世界——人と思想と働き」教文館、1998年、15～30頁
 - (2) ジョージ・オオシロ「名誉、努力、義務——新渡戸稲造——国際主義の開拓者」、中央大学出版部、1992年、1頁
 - (3) 同上、29頁
 - (4) 同上、178頁
 - (5) Inazo Nitobe, *The Works of Inazo Nitobe, Volume IV*, University of Tokyo Press, 1972, p.405.
 - (6) *Ibid.*, p.411.
 - (7) *Ibid.*, p.418
 - (8) *Ibid.*, p.433.

- (9) Ibid., pp.407-408.
- (10) Ibid., p.443.
- (11) Ibid., p.280-281.
- (12) Richard Brecht, What Is the Most Difficult Language to Learn? Johns Hopkins Magazine, February 1999, p.23.
- (13) Inazo Nitobe, The Works of Inazo Nitobe, Volume IV, University of Tokyo Press, 1972, pp.463-464.
- (14) Ibid., p.465.

(こうやま みき 本学非常勤講師)